

創建

そうこん

2018・3・25 VOL.52 NO.4 (通巻166号)

巻頭言：速水清孝・1
 福島建築文化賞受賞：阿部直人・2～3
 大学院特別講義(湯浅 昇先生)・4
 大学院特別講義(吉野涼二先生)・5
 アカシア教員山脈(エビローグ)・6～7
 学生の活躍紹介・8
 日大工学部の思い出・9
 修士学位論文発表会／卒業研究発表会・10
 卒業設計作品展・11
 卒業式・修了式の表彰者／教室ニュース・12

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

隣県で育ちながらも、福島は、長いあいだ私にとって縁のない土地でした。にもかかわらず、大学生の頃より、その福島の郡山にある日本大学工学部は、いつも頭の片隅にあった場所でもありました。

それはおそらく、大学生の私が研究に接し始めた、そのごくごく初めに目にしたのが、近代建築史がご専門の谷川正己先生の研究だったことと無縁ではないように思います。

もっとも当時私は建築計画の研究室に籍を置いていましたから妙な話なのですが、しかしそのこと自体が、どうやら私の関心がその頃からむしろ歴史の方にあったことの証拠となるのでしょうか。

建築家フランク・ロイド・ライトの研究で知られた谷川先生のお仕事は、続き物として論文に振られた番号が、その当時たしか130番台だったように思います。まだ一編の論文すらものにしていない私にとって、それはあまりに遠く果てしなく、ただただ驚嘆するばかりでした。

そんなある日、谷川先生の論文を読んでいて、記された所属にふとした違和感を覚えました。そこには日本大学の、理工学部ではなく、工学部とあったのです。

現在の理工学部が戦前には工学部だったことは知っていましたから、「何かの間違えか、あるいは誤植か」と思ったのですが、思えばこれが、工学部との出会いでした。そして、「その工学部の場所は？」と調べると東北、福島の郡山とあり、そのことを知って、さらにいぶかしく思いもしました。

そこからしばらく経って、大学院時代の所属研究室の、遙か雲の上の先輩になる日本建築史の碩学狩野勝重先生も工学部におられることを知ります。そこに至って私には、「研究をするなら中央にいないと」と言われるなか、首都圏から離れた場所で気を吐き続けるお二人を擁する郡山の工学部が、あたかも『タイガー

マスク』の「虎の穴」のように見えてきたのでした。

『タイガーマスク』の「虎の穴」と言っても、あまりに例えが古くて、何のことやら、でしょう。

『タイガーマスク』とは、劇作家梶原一騎の原作で、1969(昭和44)年から2年間、テレビアニメとしても放映されたプロレス漫画で——私もリアルタイムで観たのではなく再放送でしたが——、その、タイガーマスクの名でリングに上がる主人公伊達直人がレスラーとしての修業を積んだのが、スイスのアルプス山中に拠点を置いた「虎の穴」です。

この伊達直人の名前自体は、児童施設にランドセルを贈る奇人な人がいた出来事で東日本大震災のころ話題になりましたから、ご記憶の方もおそらくでしょう。その現実の世界での伊達直人は、この漫画の主人公の名を採ったものとされています。

「虎の穴」としての工学部

教授 速水清孝

現実の伊達直人よろしく、プロレスラー・タイガーマスクとしてデビューした漫画の伊達直人は、慈善事業が過ぎたのか——この辺りはさすがに記憶が怪しいのですが——、古巣の「虎の穴」から何故か裏切り者扱いされて——ここもやっぱり怪しいのですが——、次々と強敵を送り込まれていきます。

その、元々は伊達直人自身が修業をして、後に彼を倒すために送り込まれる強敵レスラーたちが修業をしていたのが、人里離れた場所に人知れずある猛者のたまり場、梁山泊としての「虎の穴」なのです。

建築や都市の「普通」を知りたい。それゆえ「特殊であり過ぎる中央で

なく、地方に」と考えた私にとって、郡山の「虎の穴」こそが向かうべき場所と思うようになるのに、そう時間はかかりませんでした。

その後、縁あって狩野先生の後任として一員に加えていただくことになります。谷川先生はそのことを、ご自身の退職後なくなっていた近代建築史の講座が12年ぶりに復活したとしてことのほかお喜び下さり、狩野先生もそれまで一面識もなかった後輩を温かく迎えて下さいました。

また、あてがわれた部屋は、長く歴史研が使ってきた部屋でこそなかったもののその隣で、矢作英雄先生が使われた部屋だったとうかがいました。建築家吉田鉄郎が築いた旧郵政省の建築部に籍を置いた身としては、その吉田鉄郎の後半生を支えた矢作先生の部屋を使わせていただくのは光栄この上ないことでした。

そのように始まった「虎の穴」での生活で、しかし私にとって全くの想定外であったのは、獐猛な虎が住むと思っていた「虎の穴」の学生が思いのほかおとなしかったこと、などではなく、私自身が「虎の穴」の指導者になることでした。つまり私は、「虎の穴」の一員になることを願ってはいったものの、「虎の穴」での立場を考えていなかったのです。

しかも、そうこうしている間に、赴任した際におられたそれぞれに個性的な「虎の穴」の指導者たち——長く籍を置かれた方に限れば、若井正一先生と倉田光春先生が同時に、そして松井壽則先生、三浦金作先生と続き、今年は土方吉雄先生——が定年を迎えられ、気がつけば凡庸の塊のような私が年齢だけは中堅になってしまいました。このことはなほだ不安ではありますが。

それでも、折しも「日本一教育力のある大学」を標榜し始めた本学、分けてもこの工学部を、私が外から見ているときに感じたような「虎の穴」にしたい。このことが、今の私にとっての密やかな願いなのです。

第34回福島県建築文化賞 復興賞受賞

街路にスケールを与え、連続する小さな小売店舗の街並みが賑わいを仕掛ける

非常勤講師 阿部直人

■中心市街地まちづくり活動

私が東京から郡山に戻り独立した頃、生まれ育った街の元気がなくなるのを黙ってみているのかと半ば脅しのような形で郡山の街づくりに引き込まれた。1990年頃だったと思う。中心市街地活性化事業という国、県、市が補助する街づくり事業で、若くて血気盛んな仲間がアドバイザーとして各商店街に張り付き、商店街の店主、会議所を交えて何度も絵を描き、議論し、酒も入って機運は盛り上がっていた。担当は大手：嶋影健一、中町：宗像和則、駅前大通り：佐久間宏一、文化通り：濱尾博文、さくら通り：阿部直人、その後フロンティア通りを皮切りにさくら通り、駅前大通りアーケード、なかまち夢通りなどが実現している。



■設計のいきさつと構想

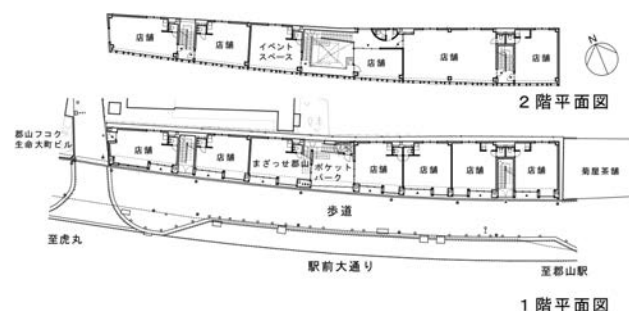
3.11東日本大震災が起き、K I K' Bの敷地に建っていた鉄骨や木造の4棟の店舗が全半壊となった。復興整備補助金を受けて建て直すことになったので相談に乗ってほしいと土方先生からお話をいただいた。先生は以前から郡山市中心市街地活性化推進委員長はじめ数えきれない程のさまざまな地域でまちづくりに関与され、駅前大通りについても景観協定やまちづくりビジョン施策案の設定をされていた。計画チームは施主、運営のまごっせ郡山、不動産業者、設計者、施工者に加え、土方研の当時の院生である大佐古和明、山田瞭、大矢康隆、中谷哲郎及び学部生の浅倉拓弥、玉木智基らにも参加、協力してもらった。

土方先生からは郡山駅前の現状と目指すべき商業集積についてのアドバイスを受けた。駅前中町側はうすいを核として小売店舗と飲食店がバランスしているが、北の大手側は飲み屋が多く日中は閑散として活気がなく、駅前の顔がゆがんでいる。敷地の奥行きはないが街区の大

半を占める間口の長さを活かし、様々な業態の小売店舗が昼夜を問わず賑わい、建築からあふれ出すイメージをメンバー全員で共有していった。

■特異な形をした敷地

駅前大通りと中町大通りの交差点から続くこの敷地は駅前の景観イメージを大きく左右する。間口が55m、奥行きが5～6mというウナギの寝床を縦に切って横から見たような形状で、駅前大通りの幅員拡張によって生まれたと思われる。きれいな街路空間は歩きやすくなるだけ、さくら通り街路整備の反省として、いかに歩行者の歩くスピードを緩めて店舗への関心を促すか建築的な仕掛けが重要と感じていた。



■設計コンセプト

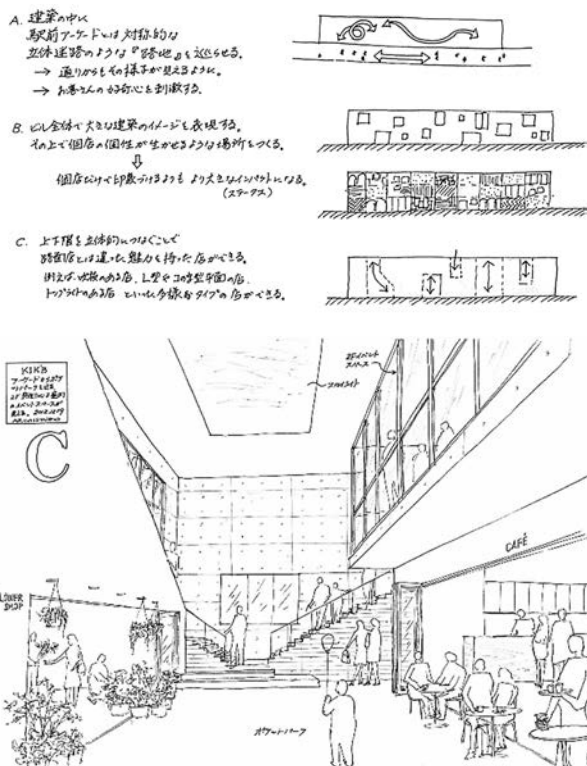
多くの検討案から通りに寄与しない3階案を除外した。通りの賑わいと統一感の両方を醸し出すようにスケールやリズム、材料を慎重に選んでいった。高いアーケードが取り付いた中心商店街で単調にならずにお客が寄り付きやすくするために、低く押えた軒先と店の前に商品を並べられるアルコーブなど、ヒューマンスケールによる古くからの店のつくり方に学んでいる。また、レンガタイルの外壁や杉板の内壁、カーテンウォールの方立に取付けたリズミカルな杉材など、時間を刻むことで味わいとなる材料で仕上げ、流行に流されない街並みを目指した。中央階段ホールは通りに開かれたポケットパークとしてテナントなどがイベントを開き、誰もが気軽に立ち寄れる場をつくり、散りばめられたサインや閉店時に現れるスチール門扉も街歩きの楽しさを提供している。2階は店の業態に合わせて通りからの見え方を自由に変えることができる。可動サインパネルを使うことで賑やかな2階店舗の表情が木ルーバー越しに現れる。

プロフィール

1956年 福島県郡山市生まれ
 1978年 法政大学工学部建築学科卒業
 1983年 富永譲＋フォルムシステム設計研究所退社
 9ヶ月間ヨーロッパに渡り、建築を学ぶ
 1989年 阿部直人建築研究所設立
 2002年～ 日本大学工学部非常勤講師
 2003年～13年 国際アート&デザイン専門学校非常勤講師
 2005年～07年 郡山市中心市街地活性化推進委員
 2009年～10年・2013年～16年
 日本建築家協会 J I A 東北支部福島地域会会長

受賞歴 (括弧内は受賞作品)

1997年 第16回福島県建築文化賞 特別部門賞 (くに屋)
 第1回郡山市さわやか建築賞 優秀賞 (くに屋)
 2002年 第6回郡山市さわやか建築賞 優秀賞 (並木の家)
 2006年 第9回郡山市さわやか建築賞 優秀賞 (池ノ台の家)
 2007年 第26回福島県建築文化賞 優秀賞 (福島県消防学校)
 第26回福島県建築文化賞 特別部門賞
 (郡山市三穂田中学校屋内運動場)
 2013年 第34回東北建築賞 特別賞
 (本宮市複合施設「えぼか」)
 2014年 第35回東北建築賞 作品賞
 第31回福島県建築文化賞 準賞
 (会津坂下町町立坂下東幼稚園)
 2017年 第34回福島県建築文化賞 復興賞 (KIK'B)



■現場でのスケール確認

基本設計で2階の店舗ファサードに設ける木製ルーバーの段ボールモックアップをつくり、現地で田邊誠(土方研OB)、佐藤雄太、大橋和也とでサイズやピッチを決めていった。建築にとってスケールの検討はとても重要で、現場での原寸確認は欠かせない。



■サイン

商業施設においてテナントが変わっても統一されたサインは景観上重要なので、東京ミッドタウンやマーチエキュート神田万世橋をデザインしたESDにサイン設計を依頼、ロゴをはじめ変化するテナントに対応できるルールをつくった。

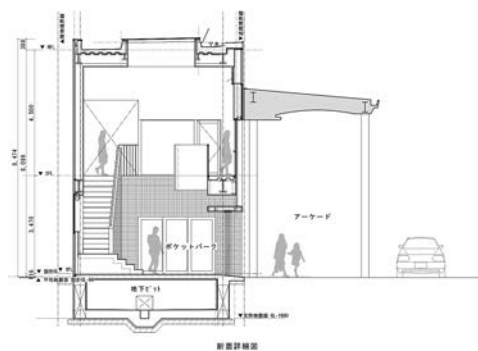


■KIK'Bの現在

隣接する施主が営む創業157年の菊屋茶舗の外装も同時に設計改修し、1街区全てが一新した。2年前、お笑いで復興の後押しをしようと吉本興業が「福島よしもと」をオープン、2階で寄席やイベントが開かれ賑わっている。現在テナントは小売店舗とエステ系店舗、人の出入りの多い事務所で埋まっている。郡山駅前まちなか交流拠点まざっせプラザがキーテナントとなり、イベント・観光・物産情報などの集約・発信を行い、ポケットパークや2階を使ったイベント、ワークショップを開催、最近では高校生が放課後自由に過ごせる場所「すきまCafe」が始まった。今後も駅前という地の利を生かし、街の賑わいの発信基地であり続けることを願っている。

■建築概要

名称/KIK'B
 (キックビー)
 施主/菊屋茶舗
 用途/物販店舗・飲食店
 構造/鉄骨造,
 2階建
 延床面積: 648㎡
 建築面積: 327㎡



大学院特別講義聴講報告

「各種建築材料の実環境下における性能」(湯浅 昇先生)を聴講して

大学院博士前期課程2年 岡田 明也

平成29年12月15日(金)、70号館7014教室にて、「各種建築材料の実環境下における性能」と題して、湯浅昇先生(日本大学生産工学部建築工学科教授)による大学院特別講義が開催され、大学院生・学部生・先生方を含めて約200名が聴講した。湯浅先生の専門分野は、建築材料学及びコンクリート工学である。講義の内容は、大きく分けて次に示す3課題から成り、それぞれ写真を交えながら詳しく説明頂いた。本稿では、その概要について述べる。

1. 海外の建築物・構造物について

はじめに、イギリスにある世界で初めて造られた「アイアンブリッジ」やイタリアの世界最大の組積造楕円形ドーム(寸法24.8×37.15m)を誇る「ヴィコフォルテ教会堂」、他にも「セント・ポール大聖堂」、「コッツウォルズ」などの有名な歴史的建造物の構造・材料について述べられた。中でも、ヴィコフォルテ教会堂は、1731年に建設された世界最大の組積造楕円形ドームであるのにもかかわらず、1987年の地震によって壊れるまで補強なしで現存していたと伺い驚かされた。一方で、イギリスやイタリアでの、一般建築物の造りや課題についても述べられた。イギリスやイタリアの民家や集合住宅には古いものが多く、新築物件より中古物件が好まれ、その造りは組積造が多い。また、組積造は鉄筋コンクリート(RC)造に比べて耐久性(耐震性)は相当に低いことから、2009年4月6日に発生したイタリア・ラクイア地震では、多くの組積造の民家が崩壊し、被災建築物は、約15,000棟にも上ることを示された。

2. RC構造物の劣化について

次に、RC構造物の劣化について解説された。RC構造物の代表的な劣化現象は、中性化や塩化物イオンによる鉄筋腐食、凍害やアルカリシリカ反応による膨張劣化などがあるが、これらの劣化にはすべて水が関わっており、水分が無い場合には、これらの劣化は生じないことを述べられた。また、このことから、水を遮断することが最大の劣化抑制策であると指摘された。

続いて、長崎県の軍艦島、沖縄沿岸部、鹿児島県屋久島などにおけるRC構造物の劣化状況を湯浅先生が実際

に撮られた写真を交えて紹介頂いた。特に、軍艦島の普段は立ち入ることのできない区域内で撮影された、日本最古のRC造集合住宅30号棟(竣工:大正15年)の鉄筋の腐食状況を示した写真についてのお話は、私が今、修士論文でまとめているテーマと関連するものであり、とても貴重で参考になった。

3. 屋外暴露試験について

最後に、湯浅先生が行っている屋外暴露試験について述べられた。

日本のように南北に長く海面からの高低差も激しい地形で、季節による年間の気象条件が大きく異なる環境では、RC構造物の劣化も地域により大きく異なるため、環境条件を明確に把握する必要がある。屋外暴露試験とは、様々な劣化環境下にコンクリートを暴露して、コンクリートの耐久性について検討する試験であり、湯浅先生は、日本コンクリート工学会の「自然環境下のコンクリート劣化研究委員会」の委員長を勤められており、屋外暴露試験の第一人者である。また、北海道、千葉県、三宅島、霧島、屋久島、沖縄県など全国各地に大学としての暴露場を所有しておられ、講演では、実体験をもとに、屋外暴露試験ならではの難しさや重要性を述べられた。

実は、私の修士論文に関わる供試体やポーラスコンクリート供試体を湯浅先生が運用する北海道及び三宅島暴露場で暴露している。暴露場での実験は、研究室で行う実験とは違う難しさがあり、ご一緒させてもらった際には、示唆に富んだアドバイスを頂いている。

4. 講義を受けて

四方を海に囲まれ、年間の気象条件も大きく異なる我が国においては、その環境に適した構造物を設計及び施工することがとても重要だと理解でき、非常に貴重な講義であった。今後、更に高度成長期などに建設されたRC構造物の劣化が予想され、補修・補強・維持管理が求められるこの時代に、建材メーカーに就職する1人として、RC構造物の補修・補強技術の発展に貢献できるようになれればと思う。



講演する湯浅教授



湯浅教授(前列左2人目)と私(後列左3人目)三宅島暴露場にて

大学院特別講義聴講報告

「建築電磁環境技術の基礎～建築工学系学生に向けて～」
(吉野涼二先生)を聴講して

大学院博士前期課程1年 諸岡志織

平成29年12月12日(火)、吉野涼二先生(株式会社環境調査事務所)による「建築電磁環境技術の基礎～建築工学系学生に向けて～」と題した大学院特別講義が、70号館7011教室にて実施された。

吉野先生は、建築環境工学の一分野である「建築電磁環境工学」「建築音響工学」の2つの分野を専門に研究活動を行っている。今回の講義のテーマでもある「建築電磁環境工学」分野は、電磁波妨害から建物内の精密機器等を防御するためのものであり、ITや先端医療にとって性能を維持するために必要不可欠な分野である。

しかし、この分野については、一般的には理解度はおろか認知度も低いものと思われる。そのため、吉野先生は、建築工学系の学生向けに、建築電磁環境技術の基本的な情報をやさしく紹介してくださった。

講義の流れは、「①電磁波とは」で基礎知識を教えて下さり、「②建築を取り巻く電磁環境」で現状の問題に触れ、「③主な対策方法」で具体的な対策を述べられた。それぞれの概要を以下に紹介する。

① 電磁波とは 互いに直交する電界と磁界が時間的に変化しながら空間や物質中を伝播する現象。

近年、電磁波は携帯電話など様々な分野で多様に利用されている。一方、携帯電話による医療機器への影響など、電磁ノイズによる電子機器の障害事例も各所で報告されているとのことである。

② 建築を取り巻く電磁環境 建物内では無線LANの普及が見込まれ、混信防止や通信品質の確保、機密情報の漏洩防止対策などが課題となっている。

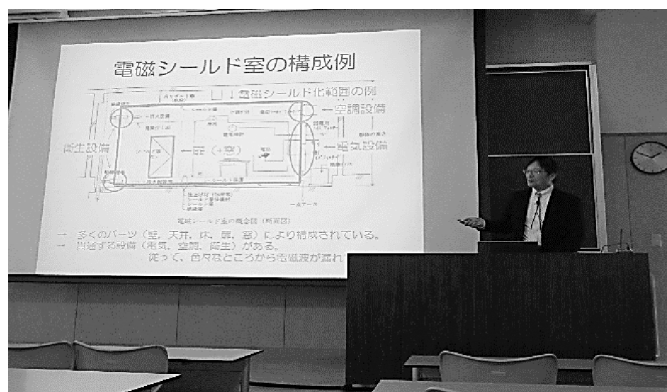
電磁波妨害による建物内の機器のシステム障害策としては、機器自体から漏洩する妨害波を減らし、さらに機器の電磁波耐性を高めることが必要であることが納得できた。

③ 主な対策方法 建物に要求される機能・用途や立地環境によっては、機器側の対策のみでは十分とは言えないため、建物側での対策の重要性が高まっている。そのため、吉野先生は自身が経験された3つの対策を説明してくださった。

(1) 電磁シールド 電磁シールドとは「外部の電磁波を室内に入れない」または「機器から発生する強い電磁波を室内に閉じ込める」ために、導電性の障壁で2つの部屋を仕切って電磁波が流れるのを制限するための囲い等である。それにより、病院医療用機器の誤作動、盗聴などを防ぐことができる。

(2) 電波吸収体 電波を吸収し、反射波を減らすことで、無線通信機器の電波が飛び交う発生するマルチパス遅延障害などといった電波トラブルを防ぐ役割を持っている物質である。構造体自身や壁面に貼り付けることが考えられる。

(3) 磁気シールド 磁気シールドとは、不要な磁気を遮断することであり、特殊な合金等で部屋や防御する機器を保護する対策である。リニアモーターカーや微弱磁場環境を必要とする実験施設で、磁気が外部に漏洩されると「磁性体の磁気が狂う」といった多大な影響が起きる為、磁界を遮蔽することが可能なこの物質を使用し、トラブルを未然に防いでいる。



大学院特別講義の様子

現代では、携帯電話などの普及により急速にITが進化し続けているが、電磁波といった分野の認知度は極めて低い。そういった現状の中、吉野先生の講義で「電磁波」といった視点から建築を学ぶことで「人・建築・電磁波」との関係性が、いかに密接であり重要なことなのか、知ることができた。そして、何よりも自身の建築へのイメージや概念などを改めさせられる、とても貴重な講義時間であった。

アカシア教育山脈 ―エピローグ― ―工学部（建築学科）を支えた校友教員―

前 土木工学科特任教授（建築22回） 永 田 進

今日、少子化により私立大学の40%が定員割れの状況下であり、存続すら危ぶまれている大学も多い。そのような中で、郡山という地方にありながら、多くの志願者を集めている工学部。建築学科も他学科と同様、年々難易度も上昇し、卒業生の評価も高い。これは創設以来70年にわたる教職員のたゆまざる教育の成果であることには異論はあるまい。さらにそれに加えて、工学部（建築学科）の教育に対し厚い信頼をお寄せくださっている高等学校の先生方の存在は無視できない。これは短期間であったが母校に赴任し、高校訪問等を通じて学生募集に少なからず関係した者として痛感したことである。その先生方の内訳を見ると、一つ目は、上・中・下の3編で取り上げた、とりもなおさず強い母校愛を持った工学部卒業の校友教員、二つ目は、文理、生物資源学部を中心とした、オール日大・桜門の先生方、三つ目は、他大学の卒業であるが、教え子を工学部に送り出し、その学生等を通して、工学部教育について理解し共鳴、応援していただいている先生方に分類することができよう。

そして東日本大震災により直接的な大きな被害こそなかった工学部であるが、風評等により志願者が大きく減少した。しかしすぐに立ち直ることができ、さらに現在では震災前よりも多くの志願者があることを考えると、二つ目、三つ目の先生方の御支援は無視できない。このあまり知られていない目に見えないこれらの先生方をしっかりと記録にとどめておく必要があると思い、このエピローグを編ませていただくことになった。

■オール日大・桜門編

「教員就職率が多い大学トップ200, 2017版」（出所、大学通信）によると、日本大学は私学の中で第2位、全体でも8位である。もっとも学生数が我国最大ということから、ある程度予想はつくところである。しかしトップの大阪教育大学はじめ上位7校は、教育系の単科大学もしくは教育学部主体の大学である。

そのようななかで、高等師範科からの出発（1901年）の文理学部や、中・高の理科教員を多く輩出している生物資源学部が、日本大学教職の中心であろう。

齋藤晃一（新潟・帝京長岡高）は須賀川市出身、附属東北高より法学部へ。卒業後請われて赴任、柔道部監督として全国の強豪校に育て上げた功績は大きい。工学部については熟知しており、建築学科を中心に毎年優秀な学生を送っていただいている。若手の後藤松太郎（静岡・沼津中央高）も附属三島高より法学部、進路課長として工学部に大きな期待を寄せている。

文理学部体育学科は平成25～27年度、全国高等学校体育連盟（略、高体連）会長を務めた小野力（元、神奈川県立平沼高校長）はじめ伝統的に多くの体育教員を輩出している。

椿央（山形県立山形中央高）、荒波和彦（静岡県立袋井高）、名倉靖之（静岡県立清流館高）、伊藤尚史（静岡県立磐田西高）も共に文理・体育学科出身。椿はスケート、バンクーバー五輪銀メダリストの加藤条治はじめ多くの選

手を育て上げ、スケートでは不毛の地であった山形を一躍有名に、荒波は硬式野球、名倉は体操、伊藤は陸上競技の指導者として、スポーツ王国静岡の将来を荷うべき奮闘している。

永年工学部に優秀な生徒を送っている静岡県立島田工高の田中学は、建築科長、全国大会常連の新体操部の顧問という激務の中、本学大学院（総合社会情報研究科）を修了した努力の人である。工学部校友教員をはじめとして若手の教員の指導に卓越した力を持っており、県教委から「優秀教員」として表彰され、将来を嘱望されている。

■みちのく青森編…新しい学校づくりと暖かい先生方

私事で恐縮であるが、どうしても記録に留めておかねばならないのは「みちのく・青森」の先生方である。筆者の高校教員の出発は本州最北端・下北半島のつけ根にある小さな町に開校した野辺地工高（現、野辺地西高）である。1973（昭和48）年4月、国策であったむつ・小川原巨大開発プロジェクトの一貫として、下北・八甲田の連山を指呼に望み、眼下にはむつ湾を見下ろす美しい自然に囲まれた町の高台に開校。恩師、故・佐藤平名誉教授の御推薦で赴任した。校長以下13名の教職員、第1期生281名のささやかな出発であった。しかし学校とは名ばかりで、実験・実習の施設・設備は未完成、体育館もなければグラウンドも石ころだらけという状態であった。しかし、これから新しい学校をつくるんだという教職員・生徒の熱い意気込みで私自身圧倒された。そんな中で、第2期生の板垣幸男（29回）は同校の第1号の工学部（建築学科）入学生であった。優秀な成績で卒業し、現在下北で一級建築士事務所を開設し多忙な毎日を送っている。そして板垣の甥である板垣鉄哉（57回）も下北の進学校・田名部高から工学部へ。浅里和茂教授に師事し、大学院を経て東京の設計事務所で活躍している。

そして昨年春、2017（平成29）年4月、板垣の地元、六ヶ所高より小笠原圭祐が建築学科へ入学。彼は野辺地工高2期生の須藤和子教諭の薫陶を受け入学。須藤は野辺地工高開校当時、数少ない女子生徒として新設校躍進の原動力となってくれた。教師になってからもずっと、工学部について気に掛けていただいた心やさしい優秀な高校教員であった。昨年3月惜しまれながら、長い教職人生に幕を閉じたが、やっと工学部に優秀な生徒を送り出すことができた大変喜んでくれた。全く恐縮の至りである。40余年も前、厳しい自然の下北の一粒が、細い細い糸であるが、工学部（建築学科）に連なった思いで感激している。

新設校に勤務していた私は多くの県内工高建築科の先生方の御指導をいただいた。当時の県内工高建築科は東北工大出身の先生方が多かった。東北工大は「2017年実就職率ランキング（卒業生500人～1000人未満）」（大学探しランキングブック2018, 出所 大学通信）で第1位等、研究、教育でも高い評価・実績を持つ伝統ある大学である。その東北工大出身の中心的存在であったのが岩城伸

行である。岩城は、母校でもある伝統校青森工が初任地、その後、南部工（現、八戸工）、十和田工の建築科新設の責任者としての大きな役割を果たされ、さらに工高建築教育の指導的立場で業績を残された。酒と高校野球を愛する人情味あふれる教育者として多くの同僚・卒業生、保護者から慕われている。十和田工で定年退職されたが、工学部を母校同然に応援していただき、今でも美しい自然に囲まれた八甲田の麓の地より大きなエールを送っていただいている。その岩城の門下生の長内幸広は昨年3月母校青森工で定年退職されたが、学科主任、進路指導主事等の重責を荷いながら、永年工学部を応援してくださった。その長内の教え子である川村秋奈は、多数の受験者のなか、たった1名という青森市技術職員（建築）の合格の快挙をなしえた。これも恩師の期待通り真面目に勉学に励んだ成果であろう。4月より故郷で新しい出発をする。長内は現在、再任用教員として、青森工定時制で、校友教員でもある山内剛教頭（工化34回）を補佐し、さらには100年の伝統を誇る母校の同窓会事務局長として、奮闘している。そして、岩城、長内とともに県内工高建築教育の主役であった濱中瑞洋は、南部工校長を経て、永年勤務した十和田工校長に就任。文武両道、ものづくりの工高として地域に密着した学校運営は多くの人々から信頼を得ている。同校からは多くの入学があり、特待生に選ばれた学生も多い。これも、岩城、濱中、そして教頭として在任し、弘前工、青森工の校長を歴任した豊島隆幸（電27回）はじめ、工学部を良く理解してくださった先生方の賜である。紙面の関係で一部の先生方しか紹介できなかったが、青森県の工高建築教育の中心を担ってこられた東北工大出身の先生方が、母校同様に工学部を応援していただいたことは、しっかりと記録にとどめておかねばならないことである。

そして、みちのく青森で忘れてはならない桜門の先生がおられる。若松陽一は伝統校弘前工より理工学部へ、卒業後は設計事務所に勤務、親子二代の日大建築卒。御尊父（若松貞一）は、県庁において建築行政の中心で県建築センター事務局長も勤められた。折からの建築教員の不足で三顧の礼で青森工へ赴任、母校弘前工で定年。温厚で人格円満、実務で鍛えた腕で多くの建築人を育てた。現在建築界の指導的立場の人の多くが、若松のお世話になった。傘寿を迎えた現在も御元気で母校の発展を祈っておられる。もう一人は、白川公正元青森工校長である。白川は山梨県立都留高から文理・体育学科へ。1969（昭和44）年、夏の甲子園決勝は、半世紀迎えた現在でも『永遠に語り継がれる名勝負』と言われる『三沢高対松山商高の延長18回再試合』である。太田幸司投手の三沢高は雪国のハンディを克服し、県勢初の決勝進出。今でこそ室内練習場等が完備して北国のハンディが少なくなっているが、当時はそんな設備もなく、公立高校ゆえに選手は全員地元出身者。

試合当日は、三沢市内はもとより青森県内の道路は車、人通りが絶え商店はシャッターを締めて閉店という有様であった。再試合は2：4で負けはしたが、球場の大声援は圧倒的に三沢側であった。この大試合のあと三沢高野球部を託されたのが、新卒の白川であった。当時の校長が日大卒という縁もあり、多くの候補者の中から技術はもとより高校教師として若くして人格をそなえた白川を招いたのである。周囲の期待は大きかったが充分その期待にこたえた。当時は今と違い、北奥羽代表ということで秋田・青森県の二県で1校の代表であった。その後、

青森高・戸山高を経て、青森工高校長に就任、高野連の会長も歴任した。県工業教育、高校野球界に大きな業績を残されたが、工学部教職特別講演会でも講演をいただき、母校のために御尽力いただいた。

このように青森県は、津軽の伝統校・木造高校出身の田中英壽日本大学理事長はじめ熱い熱い母校愛を持った校友が、教育界はじめ多くの分野で活躍されている。その美しい自然と人情厚い地で教職の出発をし、青春時代を過ごし半世紀近くたった今でもご指導賜っていることは、この上のない喜びであると共に生涯忘れることのできない大きな宝である。

■大きな応援団 ——他大学出身の先生方——

日本大学出身ではないが、工学部（建築学科）について深いご理解を賜り応援してくださっている先生方は多い。黒沢一元（横手清陵学院中・高）、達谷窟敬祐（水沢工高）、伊藤政人（新潟工高）、内山剛（磐田農高）、太田武（天竜高）、吉田正二（浜松工高）、堀井一男（沼津工高）、杉山諭（科学技術高）は進路指導主事、学科主任、進学担当等を歴任され、高校教育に大きな足跡を残されている先生方である。さらに若手で、本学主催の建築設計競技はじめ全国規模の大会で常に優秀な成績を収めている科学技術高の藤井邦光、進路指導・生徒指導面で大きな実績を上げている水野絢介（富岳館高）…等実に多くの応援団の存在は工学部（建築学科）にとって大きな財産であることを忘れてはならない。

■村田邦子先生のこと

この数年、校友教員の方々とお会いする機会が多くあったが、その時に出ることは「村田先生は・・・」というお言葉であった。総合教育（教職）に所属された故村田邦子教授（H7～H13）のことである。敬虔なクリスチャンである先生は教職課目を中心に担当され、学生の相談にも親身に対応され、学生にとって忘れられない存在であった。しかし残念なことに定年後間もなく病のため2007（平成19）年1月13日黄泉の地へ旅立ってしまった。今日校友教員が全国各地で活躍し母校に大きな力を与えてくれている姿を見ると、村田先生の存在の大きさに改めて思いをはせる次第である。

■感謝のこたえ

工高を中心に全国の中・高校に多くの教員を送り出し教育界に大きな貢献をしてきたことは、工学部の大きな特色の一つである。その背景には工業の他、数学・理科・情報・技術の複数の免許状を取得できる課程を設置したことが今日の姿に結びついたものであろう。現在、各都道府県の教育委員会は少子化により学校再編が進む中、複数の免許状を取得した者を採用の優先と明記しているところが多い。まさに工学部の教職課程は時代の趨勢を一早く見通してきた。この恵まれた環境を教職を志す学生は最大限生かすことが大切であろう。また一方、工学部を志願してきた理由の一つに、高校の恩師の影響、薦めということも大きな割合である。今後の工学部の将来を見通す時、校友教員との連携が大きな役割を果たすと思う。ただ単に校友教員が多いということではなく、情報発信をし、強い絆を作ることが大切である。最後に、この企画について多くの校友教員はじめ校友諸氏にご支援いただいたことに御礼申し上げます。そして紙面の都合上ここに登場されなかった多くの応援団がおられることもご理解いただき、さらなる母校の発展を祈る次第である。（敬称略）

学 生 の 活 躍 紹 介

TOUHOKU + N YOUTH DESIGN AWARD 2017(シェルホームデザイン 株式会社ホリエ主催)で、本学科4年次生福田晴也君の作品「蒼の学校 ―縮小地域のたたみ方の提案―」が最優秀賞を受賞されました。ここに記して祝すとともに執筆いただきました。また、4年次生藤村皓也君・柳沼明日香さんと共に佳作を受賞した3年次生寺沢鳳成君にも寄稿依頼しました。

大学での建築の学修

4年次生 福田 晴 也

私が建築を学びだして7年が経とうとしています。高校までの実習や製図とは全く違った授業が展開される大学で学修した経験は、色んな意味で私に刺激を与えてくれました。恐らく、人生における一つの分岐点となったと思える大学4年間の様々な経験を、貴重な紙面を割いて頂いて表現できることに感謝申し上げます。

さて、授業・研究室・サークル等を通して経験した色んなことが思い出されますが、低学年次から自分が特に意識していたことは、折角一緒にいるのだから、お互いに刺激しあい、価値を共有でき、時に協働できる仲間をつくることだったように思います。そのコミュニケーションツールは、言葉は勿論、スケッチや図面、そして模型やCAD・CGなど相互の得意技や状況に応じて無意識に選択していましたが、自分の持っている引き出しを駆使して、先輩・同輩・後輩など周囲に働きかけることを意識していました。その内に、周囲からも個々の特長を活かしたより多くの刺激を得られるようになり、結果的に、自分も大学生として成長できたのだと思います。

一方で、周囲と対話する引き出しを増やしたいということもあり、様々なコンペに挑戦したり設計事務所にオープンデスクに行ったりして、学外の状況や自分の立ち位置を肌で感じるようにしていました。コンペは、受賞や入選とうれしい結果ばかりでなく残念な結果もありましたし、学外における自分の立ち位置の確認も厳しい局面も多々ありましたが、そのような出来事を周囲と共有することで、自分だけでなく自分達が今、何を考え何をすべきかを教えてくれたように思います。

4年生、特に最後の半年間は卒業設計に取り組むことで、研究室の仲間や先生を中心に、上述したような周囲との刺激・価値共有・協働が複雑に相俟った、さらに密度の濃い時間を過ごすことになりましたが、それは周囲との関係も含めて数年前からの取り組みがあったからできたのかも知れません。結果はもちろん様々でしたが、周囲と建築の内容を高め合いながら全力で挑戦した結果なので、先に述べたように、結果の良し悪しは各々に受け止め、次のステージで活躍する糧として消化できていると思っています。

最後に、4年間の大学での学修を通して、教え合い・学び合うアクティブラーニングであったり、自分で考えて行動する自主創造であったり、話題の教育手法や日本大学の理念に近いことを学修・体感できた感じです。それは、幅広い解釈が可能な「建築」という分野で、学生どうしの距離感が近い「日本大学工学部」であったことを前提とすると、そのような機会を与えてくれた日本大学工学部建築学科という環境に改めて感謝する次第です。



生徒同士でエスキスをする卒業設計の風景

コンペに臨んで考えたこと

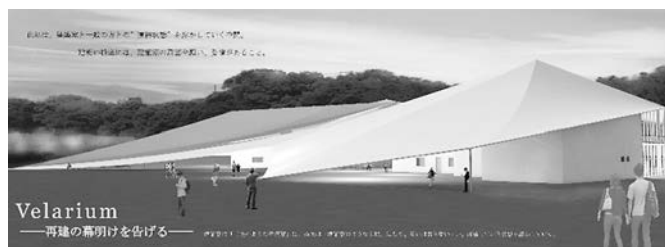
3年次生 寺 沢 鳳 成

このたび「Velarium ―再建の幕明けを告げる―」と題する作品で、東北6県と新潟県の学生を対象とする建築デザインコンペで佳作をいただきました。

実はこれは、このコンペに向けて作ったものではなく授業の設計課題を提出したものでした。それは今回のテーマ(流動のなかにある建築)が私の作品にうまく合致したことに加え、4年生や院生も参加する中で、自分の素の力がどこまで通用するかを試したかったためでした。

建築は記憶の蓄積装置としての役割を持っています。その思い出や情感を後世に伝えていくために、私は今、建造物の保存・修復の職に携わりたいと考えています。

一見、創造性は不要と思われがちな仕事ですが、むしろ新築以上に創造的で難しい領域だと思います。その道に進む上で、普段の課題に真摯に取り組むことはもちろん、様々な場を見つけて自分の考えや力を試し、研鑽を積むことが必要ではないか。あるいは不遜に思われかねない今回の選択は、そうしたことを考えた結果であり、評価していただけたことをうれしく思っています。



日本大学工学部の思い出

～この有意義な経験を糧に、新たな第一歩を～

長島 久敏（出身校：栃木県立宇都宮工業高等学校）

アクティブラーニングという言葉をよく耳にするようになった。受動的な授業は確かにどこか退屈で、私の大の勉強嫌いはそれが原因だったのかもしれない。そんな私が大学院修士課程を終え、これから博士課程へ進むとしている。きっかけは大学4年次の卒業研究で、担当教員や研究先の研究者に質問をする際のことだった。「何がわからないのか」が、わからなかったのだ。勿論返答された内容もわからず、自分の無知さにショックを受けて必死に勉強したのを覚えている。しかし、生まれて初めて勉強らしい勉強をしたという実感があった。無知であることを認識し、それが研究や学習のモチベーションとなったのだ。このことが大学院進学のかきかけとなり、修士課程の2年間は、大学と産総研福島再生可能エネルギー研究所(再エネ研)を行き来しながら研究活動を行った。再エネ研では様々な分野の研究者が在籍し、大学院生をリサーチアシスタントとして受け入れを行っている。現役の研究者と直にコミュニケーションができる貴重な場であり、自身の研究を進めることができるためメリットが大きい。私の研究テーマは風力発電に関する研究で、風車の課題の一つである騒音問題の解決に向け取り組んでいる。博士課程では再エネ研と継続して連携を図り、再生可能エネルギーによる自立した地域社会の形成に貢献できるよう研究を進めていく。

漆原 秀明（出身校：私立日本大学東北高等学校）



私は、在学中にある本に巡り合えたことで、大学院進学、そして構造設計士を志すことを決めました。その本とは、シドニー・オペラハウスを手掛けた20世紀を代表する構造家であるピーターライス氏の自伝です。私は、「構造家とは、本質的に、革新性に満ちた方法を考えるもの」という一文に感銘を受け、構造学を熟知しているからこそ成せる建築について探求していきたいと考えるようになりました。所属した鋼構造デザイン研究室では、構造を学ぶことの醍醐味を体験できる機会をたくさん与えてくれました。研究活動の一環として参加した2017年JSCA東北支部構造デザインコンペでは、いままでにない合理的かつ挑戦的な構造デザインを探求することを試みて、大変貴重な経験を得ることができました。特に、意匠系の同期とチームを組み、互いに刺激を受けながら、日々ディスカッションを重ね、一つの作品を作り上げたことが印象的です。その積み重ねが実を結び、最優秀賞と最多得票賞を頂けました。卒業後は、日本大学工学部に所属した誇りを胸に、革新性に満ちた構造設計士を目指して、日々社会に貢献していきたいと思っています。

川村 秋奈（出身校：青森県立青森工業高等学校）

私は高校3年生の時『つながる家』のテーマのもと、第60回日本大学全国高等学校・建築設計競技（幹事校：工学部）に応募しました。理工学部でのプレゼンテーションを経て、優秀賞を受賞することができました。大きな達成感とともに、評価して下さった日本大学で、もっと建築について学びたいという気持ちが芽生え、日本大学工学部への進学を決意しました。

大学に進学してからは、高校時代に学んだことを土台にし、日々勉強に励みました。1年生の頃は勉強で手一杯でしたが、2年生からは将来について真剣に考えるようになりました。出身である青森市のまちづくりに関わりたいと思い、青森市役所の建築職を目指そうと決めました。そして3年生からは都市計画第1研究室に所属し、4年生では地元青森市をフィールドとした卒業設計に励むとともに、土方先生ご指導のもと、都市計画を学びました。白河での小学6年生児童の環境学習活動など、土方研究室での実践的なまちづくり活動は大変貴重な経験でした。そして無事、青森市役所の建築職への就職が決まり、夢への第一歩が始まります。勉強ばかりの日々で辛かった時期もありましたが、それを乗り越えたからこそ自分の希望する就職先に就けたと思います。大学生活での様々な経験を糧に、社会人になり地元に貢献できるよう頑張りたいと思います。

今泉 花梨（出身校：私立郡山女子大学附属高等学校）

私は、住環境計画研究室での活動で、UDや須賀川市議場のパンフレット作成を行いました。郡山におけるUDの普及状況をより多くの郡山市民に伝えたい。須賀川市議場の魅力を須賀川市民だけでなく、より多くの人に伝えたい。このような想いを軸に作成しました。2つのパンフレットを作成する上で、共通点があることに気が付きました。第一に、話し合いを積み重ねていく上で相手方の意見をいかにうまく取り入れることができるか。第二には、それらに創意工夫を加え、自分の案を魅力的に伝えることができるかを考えることでした。その中で苦労した点は、意見を全否定されることや相手方との時間の調整でした。勿論、デザインや見やすさ、レイアウトなどを考えることも大変でしたが、その分得られるものも多くありました。話し合いによって得られたプレゼン力、コミュニケーション能力、提案力、デザインをすることの楽しさ、何よりも第3者からの意見に耳を傾ける大切さを改めて学ぶことができました。それと共に、自分の考えの甘さと相手への配慮、敬意を次第に見つめ直すようになっていきました。学生時代にパンフレット作成に携わった体験から、社会人としての振る舞いにおいて大切なことを学ぶことができ、とても有意義な良い経験となりました。今後、社会人になってからもこれらを生かしていきたいと思っています。

平成29年度 日本大学大学院工学研究科建築学専攻 修士学位論文発表会

日時：平成30年 2 月13日(火) 場所：70号館 6 階7066教室

1. CLTパネルの鋼版挿入ドリフトピン接合に関する実験的研究考察 長田貴明 (指導：野内英治 准教授)
2. 病院における事業継続計画及び廃棄物処理に関する調査報告 青木理久 (指導：森山修治 教授)
3. 東北地方に現存する地歌舞伎の実態に関する研究 我妻佑磨 (指導：浦部智義 准教授)
4. 高強度鉄筋コンクリート柱に生じる初期応力が1・2方向曲げ性能に及ぼす影響 漆原秀明 (指導：浅里和茂 教授)
5. 塩化物イオン固定化材混入断面修復材料及びそれを用いた工法のマクロセル腐食抑制効果 岡田明也 (指導：出村克宣 教授)
6. 小学校の教室の木質化に期待される効果に関する研究 ―空間意識と掲示に着目して― 小田貴彦 (指導：浦部智義 准教授)
7. 中山間過疎地域における単独世帯員の居場所とその利用実態に関する研究 申銘規 (指導：浦部智義 准教授)
8. 管理・運営と利用実態から見た地域交流施設に関する研究 高梨真弘 (指導：浦部智義 准教授)
9. 風車騒音の計測技術および音源分離手法に関する研究 長島久敏 (指導：濱田幸雄 教授)
10. 住民主体による景観まちづくりに関する研究 ―まちなみ将来像の共有化のための心理量評価― 真中健吾 (指導：鈴木晃 教授, 土方吉雄 准教授)

平成29年度 日本大学工学部建築学科 卒業研究発表会

日時：平成30年 2 月 6 日(火) 場所：70号館 1 階7014教室 (五十嵐ホール)

1. 3次元FEMによる鉄筋コンクリート柱の靱性評価 黒田啓太 (指導：浅里和茂 教授・堀川真之 助教)
2. シンセグリティ構造の振動特性 桐生翔太 (指導：Buntara S. Gan 教授)
3. バクテリアによるひび割れの自己治癒機能を有するセルロース繊維混入モルタルの基礎的研究 涌井凜太郎 (指導：Sanjay PAREEK 准教授)
4. 模型実験における測定コードの影響に関する検討 今井啓太・山口光・小山傑 (指導：千葉正裕 教授・日比野巧 助教)
5. ポリマーセメントモルタルの性能評価に関わる試験方法の検討 伊東成章 (指導：出村克宣 教授・齋藤俊克 専任講師)
6. K-net 強震記録を用いた入力地震波の基準化に関する研究 白石田啓生・嶋田健人・田中宗一郎 (指導：野内英治 准教授)
7. 日本の建築構造・設備設計者の職能に関する歴史的研究 山上雅稔・岡部志保 (指導：速水清孝 教授・山岸吉弘 助教)
8. 都市公園におけるパークマネジメントに関する調査研究 阿部翼・日比将斗 (指導：市岡綾子 専任講師)
9. 山間過疎地域に現存する野外舞台の活用実態 中村衣里 (指導：浦部智義 准教授)
10. 戸建住宅の間取り構成からみた加齢対応住宅性能に関する適合性評価 野原裕人・大嶋佳奈・佐藤輝 (指導：鈴木晃 教授・宮崎渉 助教)
11. 音響縮尺模型による多目的ホールの音響特性に関する研究 最上依理加・大越友輔・菅原千寛・鈴木智貴・高橋秀治・日野皓介 (指導：濱田幸雄 教授)
12. 小学生の景観学習に関する研究 中村豪志・飯島雅貴・尾澤奈津海 (指導：土方吉雄 准教授)
13. 介護保険老人施設を対象とした火災安全性の研究 森田祥太 (指導：森山修治 教授)

平成29年度卒業設計コンクール・展示会等出展作品

本年度の卒業設計展は、2018年2月6日（火）から8日（木）までの3日間にわたり、70号館1階7012・7013教室にて開催され38作品が出展された。常勤教員と10数名の非常勤講師も参加し、8日の午前にはポスターセッション形式で、午後には公開形式でプレゼンテーションが行われた。交流を主とした複合施設や産業復興を意識した地域再生を目指した建築群など単体建物の提案に留まらず、まちづくりの視点から賑わい創出を促す建築的操作を主とした作品、まちづくりの持続可能性を意識した次世代の居場所となり学びの場となる建築など、様々な提案が見られ、見応えのある作品が多いと参加教員から評価された。川辺や港周辺などの水辺をフィールドとした作品が多く見られたことも特徴的である。昨年から引き続き、選定された敷地は出身地周辺が多い傾向がみられ、地域への貢献を意識しているものの、平面計画に対する新たなアイデア等は見られず、残念であった。

2月20日（火）～22日（木）の3日間には、郡山駅前ビッグアイ6階を会場に、外部卒業設計展等への出展作品を含む全8作品による学外での卒業設計作品展を開催した。初日の午後にはJIAによる卒業作品講評会が開催され、昨年度から設立された「日本建築家協会（JIA）東北支部福島地域会賞」1作品が、3時間を超える公開審査を経て選定された。出展された全作品に対する講評が行われ、参加学生たちには10名余の建築家による直接講評を聞く、実りある機会となった。

また、昨年3月から開始した秋田銀行郡山南支店のロビー空間への卒業設計作品を展示する件も継続することとなった。郡山や福島県に縁の深い作品を、年間を通じて入れ替え展示する予定である。営業時間には是非来場していただきたい。

外部卒業設計展示会・学外展示会等出展作品一覧

■日本建築学会「全国大学・高専卒業設計展示会」

遠藤尚弥（指導：浦部智義 准教授）

作品名：系譜の音 ―ハタオリを続ける町―

■日本建築家協会「全国学生卒業設計コンクール2018」

■第2回日本建築家協会東北支部福島地域会賞

柳沼 明日香（指導：浦部智義 准教授）

作品名：モヤイの航海

―塩から始まる島の未来―

■レモン画翠「第41回学生設計優秀作品展」

佐藤太寿（指導：市岡綾子 専任講師）

作品名：写真の住処 ―写真たちの物語―

■近代建築「卒業制作2018」

青木雄大（指導：浦部智義 准教授）

作品名：中道 ―段階的建築群―

■日本インテリア学会「第24回卒業作品展」

武井碩毅（指導：浦部智義 准教授）

作品名：大築島 ―島の修復―

■学外作品展出展作品（上記作品の他）

福田晴也（指導：浦部智義 准教授）

作品名：細解発 ―衰退した温泉街の再生―

北沢汐瀬（指導：渡部和生 特任教授）

作品名：失明した文明

―アンリアルなりアリティが現す、
時代の表層―

川村秋奈（指導：土方吉雄 准教授）

作品名：わんどのがっこ

―65歳から始まる大人の学校―



平成29年度 卒業式・修了式における表彰者

平成30年 3月25日

◇斎藤 賞◇

修士論文「中山間過疎地域における単独世帯員の居場所とその利用実態に関する研究」

申 銘規（指導：浦部智義 准教授）

◇北 桜 賞◇

修士論文「塩化物イオン固定化材混入断面修復材料及びそれを用いた工法のマクロセル腐食抑制効果」

岡田明也（指導：出村克宣 教授）

◇桜 建 賞◇

卒業設計「モアイの航海 ―塩から始まる島の未来―」

柳沼明日香（指導：浦部智義 准教授）

卒業論文「テンセグリティ構造の振動特性 ―SEMを用いた固有値解析―」

桐生翔太（指導：Buntara S. Gan 教授）

卒業論文「バクテリア併用セルロース繊維混入モルタルによるひび割れの自己治癒機能に関する基礎的研究」

涌井凛太郎（指導：Sanjay PAREEK 准教授）

卒業論文「日本の建築構造・設備設計者の職能に関する歴史的研究」

山上雅稔・岡部志保（指導：速水清孝 教授，山岸吉弘 助教）

卒業論文「都市公園におけるパークマネジメントに関する調査研究」

阿部 翼・日比将斗（指導：市岡綾子 専任講師）

◇優 等 賞◇ 桐生翔太，新井紀子，遠藤史哉

◇工学部長賞◇

学術・文化部門：漆原秀明・我妻佑磨・海老澤奈苗 JSCA東北構造デザイン発表会2017（学生の部）

（一般社団法人日本建築構造技術者協会東北支部主催） 最優秀賞・最多得票賞受賞

作品名「多様化する集積梁 ―敷地の要素から組み立てる―」

学術・文化部門：伊藤和輝 第20回記念JIA東北建築学生賞（公益社団法人日本建築家協会東北支部主催）

奨励賞（みやぎ建設総合センター賞）受賞 作品名「連続と交錯 ―記憶と理想の架け橋―」

学術・文化部門：柳沼明日香 第21回JIA東北建築学生賞（公益社団法人日本建築家協会東北支部主催）

最優秀賞受賞 作品名「鼓動する橋」

学術・文化部門：福田晴也 TOHOKU + N YOUTH DESIGN AWARD 2017（シェルホームデザイン 株式会社ホリエ主催）

最優秀賞受賞 作品名「蒼の学校 ―縮小地域のたたみ方の提案―」

◇父 母 会 賞◇ 荒井就英，山上雅稔

■ 8月28日，速水教授は，福島県建築大工業協会より，第14回建築匠賞コンクール審査委員長を委嘱された。なお一次審査は2月7日，二次審査は3月17日に開催された。

■ 12月1日，PAREEK准教授は，印度工科大学(IIT)同窓会(日本)主催の『Pan- IIT India- Japan Convention（日印コンベンション）2017―進展する持続的なパートナーシップ』において，ゲストスピーカーとして招待され，感謝状が授与された。

■ 東北6県+新潟の建築学生を対象としたデザインコンペ「TOHOKU + N YOUTH DESIGN AWARD 2017」において，福田晴也君（浦部研・4年）が最優秀賞を受賞，藤村皓也君・柳沼明日香さん（共に浦部研・4年）・寺沢鳳成君（速水研・3年）が佳作に入選した（p8参照）。

■ 12月7日，日本建築家協会（JIA）東北支部・日本建築学会東北支部建築

デザイン教育部会主催の建築学生テクニカル・セミナー 2017において，柳沼明日香さん（前掲）がJIA東北建築学生賞最優秀賞受賞作品のプレゼンテーションを行った。

教室ニュース

■ 12月19日，森山教授は，日本建築学会社会ニーズ対応推進委員会特別調査委員会主催によるシンポジウム「木造旅館の未来を考える」において，「歴史的な大規模木造宿泊施設の火災安全性をどう実現するか」と題して講演された。

■ 浦部准教授は，2018年1月の日本建築学会WEB建築討論特集『「造」と「材」』に，「福島県内の仮設住宅の現状と再利用に関する報告」と題して寄稿された。

■ 1月26日，市岡専任講師は，国土交通省都市部局より，福島県における国営追悼・祈念施設(仮称)事業評価監視委員会委員，同省東北地方整備局より，同委員会検討部会委員を委嘱された。

■ 浦部研究室は，2月10日，福島県庁で行なわれた「大学の力を活用した集落復興支援事業」の報告を行った。

■ 2月26日，浦部准教授と市岡専任講師は，富岡町より，富岡駅前にぎわいづくり検討委員会委員を委嘱され，浦部准教授は委員長に選任された。

■ 3月4日に行われた，仙台デザインリーグ「卒業設計日本一決定戦」において，柳沼明日香さん（前掲）が決戦進出10選中から特別賞を受賞，北沢汐瀬君（渡部研・4年）100選に選出された。

■ 3月15日，速水教授は，BankART schoolにて，『シリーズ 横浜で活躍した建築家 第4期』の一環として，「横浜市の行政建築家 吉田亮一」と題する講演が行われた。